

自己を映す鏡の中で

—*The Professor's House*における St. Peter の自己探求—

志水智子

Abstract

In Willa Cather's *The Professor's House* (1925), the author describes an inner conflict of a fifty-two-year-old professor. St. Peter, the professor, watches internal world of various people as if he looks into mirrors. In this novel, St. Peter searches for what he wants to be and recognizes what he must be in his own way of thinking. This essay aims to explore the significance of life after one's prime years or a certain success for St. Peter and for Willa Cather.

St. Peter always feels like acting a social role as a father and a successful scholar while holding an instinctive self. While his family are materialistic, he hates materialism and commercialism, and identifies himself with his late student, Tom, who purely esteemed academic products and didn't want money. St. Peter thinks that Tom embodies an ideal way of life for him. However, Tom dies young and the relics of an ancient Indian civilization which Tom finds are not evaluated by an official Indian committee in America. On the other hand, St. Peter's academic book gains prize money which satisfies his family's materialistic desire and brings a new house for them. That is, St. Peter cannot escape from materialistic American society even though he wants to believe the autonomy of scholarship which has nothing to do with consumerism and tries to search what his instinctive self wants.

When he is saved by a housekeeper, Augusta, from gas poisoning, he finally identifies himself with abstemious Augusta who lives for others and has a religious mind. As a person of old age, St. Peter accepts his social self and to live in his a contemporary materialistic American society.

序

Willa Cather の *The Professor's House* (1925) は、彼女の処女長編小説 *Alexander's Bridge* (1912) と並んで、作者の自伝的要素の強い作品である。たとえば David Bryant Humes の “The most negative criticism of *The Professor's House* revolves around Cather's failure to separate her fictional character, Godfrey St. Peter, from her own self” (Humes 152) という指摘は、Cather 自身の当時の人生観が主人公に投影されすぎる傾向にあったことを示唆する。Cather は *One of Ours* (1922) でピューリツァー賞を受賞後、好評を博した *A Lost Lady* (1923) を出版し、作家としての成功の一つのピークに達した。そしてその反面、彼女は健康を害し、療養生活を経た後にこの作品にとりかかっており、当時の彼女の生活は達成と老境を味わう St. Peter を思わせる¹。さらにこの作品が発表された年には、Cather は主人公 St. Peter と同じ五十二歳になっており、この年齢でこそ備わる人生観を主人公に物語らせていると考えられる。

この作品は大きく三部に分かれるが、Cather は音楽のソナタ形式を意識してこの構造を考え、また彼女がこの作品のアイデアを得たのは、1923年のパリ滞在中にルーブル美術館でオランダ人画家のある絵を見た時だと言われる (Sergeant 203)。物であふれた室内に一つの窓がある様子が描かれたその絵の中では、窓の外にのびやかに海が広がる様子も描かれていた。その絵の構図がそのままこの作品の構造を象徴し、絵画の窓の外の海が象徴する自由な世界、つまり第二部は、物欲が充満した St. Peter の生活に差し挟まれる “freedom from the material world” (Meltzer 117) を示唆する。作品を構成する三つの部分は脈絡がないと批評されることもあるが、その配置と組み合わせ自体があるメッセージ性を備えていると考えられる。

この物語を通して St. Peter はさまざま人々を鏡のように見なして、その中に自己と共に鳴する資質、あるいは自己とは異質な資質を見出していく。

そこで本論文では、この作品を St. Peter の自己探求と自己認識の過程とともに、それによって Cather が描きだそうとした成功した後の人生、青春を失った人生の意義について考察していきたい。また St. Peter が得た人生観、現実感によって示唆される、Cather 自身の人生観についても仮説を導き出していきたい。

I 家族によって映し出される二つの自己

第一部 “The Family” は、“The moving was over and done” (11)² という暗示的な一文で始まる。この文は家族の新しい家への引っ越しが終わったことと同時に、一つの成功を手に入れるなどを頂点とした St. Peter の研究者としての活動の「動き」が終わったことを伝えていると考えられる。この第一部においては St. Peter は世俗的な家族とその一員としての自分自身を鏡としてその中に、社会的存在としての自己と、現実と折り合いのつかない本質的な欲求を備える根源的な自己という二つの自己の姿を見ている。この様子は、“St. Peter had managed for years to live two lives, both of them very intense” (28) と描かれる。Leon Edel はこの二つの自己が Cather 自身の二面性を表すことを指摘し、“The world did break in two for her[Cather]. One part of it moved on ; she remained stranded in the other. And *The Professor's House*, in its very structure, contained this break” (Edel 216) と述べる。Edel の述べる、「動き」続けることに抵抗を感じない家族に囲まれながら、St. Peter は彼らに違和感を覚える。St. Peter はすでに研究生活においても家庭生活においても仕事を成し遂げ、社会的地位と財産を築いている。職場において彼はその立場と年齢にふさわしい役割を果たすことをますます求めしていくのだが、彼は根源的な自己の欲求を抑圧することに不安を覚えるのである。このように物質的に豊かではありながら St. Peter が自分の現状を嫌う気持ちは、彼がしきりに「若さ」に執着することによって象徴的に示される。例えば、“he loved youth” (28) と描かれる場面、老けていく

ことを嘆き若い時にドラマチックに死ぬべきだったということを妻に “We should have been picturesquely shipwrecked together when we were young” (94) と言う場面では、彼の現在の年齢からの逃避願望がうかがえる。また彼は、子ども時代の思い出である “blue water” (30) に強く影響され、就職先の大学も湖に近いという理由で選んでおり、若い研究者としての時間と情熱を注いだ著書 *Spanish Adventures in North America* を書いた古い家の書斎から離れたがらない。このように彼の過去の思い出に対する執着は、彼の新しい時代や環境への順応を妨げる。彼の過去志向と若さへの執着に重なる Cather の意識を、Sargent も “She[Cather], whose vision was directed to the past” と表現している³。

昔にとらわれる St. Peter に対し、妻 Lillian をはじめ娘たち夫婦の方は物欲や嫉妬にとらわれ、物欲が支配する物質主義的な環境をいわば積極的に生きる。Milton Meltzer は “Cather tried to make the first part of the novel feel overcrowded and stifling with new things that money lead to” (Meltzer 118) と述べる。Meltzer の指摘のように、この第一部では所有される財産の差による人間関係の軋轢が強調されていると考えられる。とりわけ長女 Rosamond の夫 Louie は、妻のかつての婚約者であった Tom Outland が残した学問的発見を商業化し、その遺産で経済的に豊かな生活を楽しむことはばからない。彼はその遺産で新築した自分たちの別荘を “Outland” と名付けることを嬉々として家族に伝えるし、Tom の金を大学に寄付することや Tom の記念館を作る企画にも積極的である。このことから Louie にとっては、商業主義社会の中で Tom の学問の成果を通貨化し、それを物質的な、ひいては精神的な豊かさを自他ともにあがなうために役立てることは大いに善なる行為であり、誇らしいことである様子が読み取れよう。Louie の生き方は時代のニーズに合っていると言え、彼は時代の変化に順応しその中で自らのアイデンティティーを開拓していく人物の典型である。St. Peter の勤める大学もまた商業主義的な社会の風潮に影響されている。St. Peter が

唯一その学問的業績の価値を認める Crane 教授さえ、教え子であった Tom の遺産の行方に目を光らせている様子は St. Peter を滅入らせる。このような物欲に支配された職場の雰囲気にも St. Peter はついていけないように感じ、孤独と過去に魅かれてゆくことになる。

彼が手に入れた家族や業績、財産などはすべて彼の青春時代のエネルギーの賜物なのだが、それらは年齢を重ねた現在の彼自身の自己が求めるものではない。自分が青春時代に愛したものは色あせつつあることを St. Peter は家族という鏡を通して確認する。彼は職場では大学の商業主義化に反対し、家庭では彼の著書が「オクスフォード賞」を受賞した際の賞金によって建てられた新しい家に移り住むことを拒む。新しい家は未来を志向する同時代の人々の物欲を象徴するからである。

このような環境と時代の動きの中で、半ば逃避的に St. Peter は彼の根源的な自己に共感するものとして “remarkable mind” (62) を備えていたと感じる、今は亡き教え子である Tom の生き方に魅かれる。だが彼の周囲の人々の間に嫉妬や物欲を生み出す原因となったのは他ならぬ Tom の学問的発見であったことは暗示的だ。この作品では教育や学問というものが金銭的利益や社会的地位と切り離せないものであることが繰り返し描かれる。大学の商業主義化を嫌う St. Peter 自身も結局のところ研究上の著作によって妻の物欲を満足させ、教育活動によって生計を立てており、消費社会における教育や学問の資本的価値を享受している。また彼は妻の財産がなかったならば新婚生活は幸福ではなかったことも認めている。このような生活をしながら周囲の人々を避け、利益とは無関係な純粋な学問の喜びに魅かれる St. Peter は自己矛盾を抱えていると言える。彼は職業と家族を持つ社会的存在としての自己の一面をむやみに否定するのである。

家族や周囲の人々が金銭と物欲に執着することに嫌気がさす St. Peter の様子は、彼が妻と買い物に行く際に、“buy” という言葉すら鼻につき、“Let's omit the verb ‘to buy’ in all forms for a time” (154) と言う場面からも

うかがえる。また彼は、もし Tom が生きていたなら、“My fortunes have corrupted men”（150）と言うのではないかと想像することで、Tom の目線から現在の人々の様子を批判視する。Tom は大学に入ってからは物理学を専攻し、独自の真空装置の原理を発見するが、その特許を取る途中、第一次世界大戦で戦死する。そして Tom に代わって彼の学術的な発見を業者に売ることで莫大な金銭収入を得ることになった、娘婿である Louie の行為を St. Peter は苦々しく感じる。このような St. Peter の意識は、第二部 “Tom Outland's Story” の中で、古代インディアンの遺物をドイツ人収集家に売り渡した Blake に憤慨する Tom の意識として繰り返し描かれ、Tom が St. Peter の根源的な自己の理想を表象することが読み取れる。Tom という「ミステリアス・ストレンジャー」（Skaggs 79）が突如として St. Peter の生活に介入してきて彼の身の回りの人々の嫉妬心や物欲を搔き立てたことにより、St. Peter は自身と周囲の関心の違い、また彼の抱える自己矛盾を見てとるのである。このように St. Peter は社会においても家庭においても同時代アメリカ人が持つ世俗性を回避し、自己を Tom の過去と同一視することで自己の深層をさぐり始める。もちろん St. Peter の社会の現実を回避しようとする姿には、作者 Cather の、商業主義的なアメリカ社会や人々の物欲をあおる社会的風潮に対する反骨精神が読み取れるのである。

II 見失われてゆく根源的な自己

第二部 “Tom Outland's Story” は、形式上 Tom の独白であるが、Tom は St. Peter の本質的な自己が求める生き方を表象すると考えると、この部分は St. Peter 自身の自己探求経験を示していると読むことができる。この点について Marily Elizabeth Throne は Tom のことを “In a very real sense, he is St. Peter's *alter ego*, combining the best of both selves”（Throne 176）と述べる。Throne の考えでは、Tom は St. Peter の理想的にバランスのとれた社会的及び根源的自己を体現する。だがそんな Tom が St. Peter の現在の年

齢に至るまで長生きしない点は示唆に富む。St. Peter は、Tom の歴史を追究する経験、すなわち、世間から隔絶した高台で古代インディアンの遺跡を発見し、その遺物の考古学的価値の究明に奔走する行為を鏡として見ることで、そこに消費社会とは切り離された学問の自律性と、過去の価値の未来に対する優越性を信じる自己の一面、Donald E. Larson が “clinging to the past” (Larson 40) と呼ぶ自己の一面を見ているのである。ブルー・メサで Tom が自然と一体化しながら感じ取っていく幸福は、St. Peter の自己が欲求するものであり、それはまたカール・ゲスタフ・ユングが考える「個性化」の過程をも彷彿とさせる。ユングが考える「個性化」とは、個人が自分自身になる、つまり不当な社会の影響から解放され、ほとんど自分自身の内的発展にのみ心を向けることとされる。ブルー・メサでの Tom は、社会的な物差しによってではなく、自分の直感によってのみとらえた幸福観と使命感によって生きるのである。ここで Tom は年上の友人 Blake、Henry Atkins 老人と牧歌的な生活を共にし、“beyond female company” (Reynolds 144) たる状況で、男同士のホモソーシャルな疑似家族を形成する。女性との出会いを子孫の創造と家族の形成の出発点とみなすのなら、Tom や彼に共感する St. Peter にとって女性とは家庭という小社会と社会的自己の源と考えられ、それゆえ異性とのかかわりのない男性のみの彼らの生活は、St. Peter の、社会の影響を逃れた根源的な自己への回帰願望を象徴する。

学問研究を職業とする St. Peter もまた Tom とおなじく原始文明の探求に喜びを見出す。ところが Tom の発見は現代アメリカ都市社会に生きる専門家からは相手にされず評価されることはないのに対して、St. Peter が「純粹な」学問的喜びを味わいながら書き上げた著作 *Spanish Adventurers in North America* が社会において評価され、賞金という形でその価値を算出され、その賞金もまた消費社会の中で家族の物欲を満たす新居へと形を変え、経済循環を遂げていくことの対比は意味深長である。つまりいくら St. Peter が商業主義とは無関係な学問のあり方に魅かれても、明らかに彼の研究成果

は物質主義的な現代アメリカ社会の中で評価をされるのであり、また彼は評価されることで職業人としてのアイデンティティを得、それによって社会的な自己を確立している。St. Peter は社会から評価されることで歴史学者であり続けるが、Tom の考古学者的な使命感は発見した遺跡が社会の権威から評価されないことで消える。また、その後物理学で身を立てようとした際の Tom の発明は、彼の死後商業化されることで他人の家族の人間関係に軋轢を生むほどの存在感を持ち続けるのである。このような Tom の、他者から評価されない遺跡に対する考古学的愛好心や自ら商業化することはなかった物理学的発明に至るまでの情熱は、他者や社会と妥協しなくともよい若さと純粋さ、そして同時に、それらが変化する「現実」に耐えて長続きすることのないはかないものであることを象徴する。

Cather は作家として Henry James の影響を受けたと言われ、主人公 St. Peter も Henry James の作品 *The American* (1877) の一節を引用する様子が描かれているが、Henry James がその *The American* に付けた序文の中で「ロマンティック」であることと「リアル」であることについて次のような見解を述べている部分がある。

The real represents to my perception the things we cannot possibly *not* know, sooner or later, in one way or another.... The romantic stands, on the other hand, for the things that, with all the facilities in the world, all the wealth and all the courage and all the wit and all the adventure, we never *can* directly know. (James 31-2)

ここで James は、「リアル」であるとは、いずれ我々にとって必ず明らかになる事柄であり、対して「ロマンティック」であるとは、どのような手段をとっても我々には決して分からぬことであると定義する。Tom の評価されることも金銭化されることもない学術的情熱、すなわち St. Peter の根源的な自己の理想は、この Henry James の「ロマンティック」なことの定義

を彷彿とさせる。Tom がブルー・メサで見つけた遺跡は社会の権威によって価値の数値化を試みられることのないまま、James の言う「ロマンティック」なものに、つまり決して分からぬ神秘のままに残される。同じように St. Peter が Tom という鏡を通して見ようとした、社会性を排した自己のあり方というのもまた「見えてこない」ことが示唆される。若くして生命を断つ Tom 自身も「ロマンティック」な存在、“romantic hero”(Skaggs 82) であり、その老年期は「ロマンティック」なまま、現実と妥協する必要のない、また時間の変化に耐えることのない若さの象徴となる⁴。

メサで発見したインディアンの遺跡が調査されることを願ってワシントンに行った Tom は、物質主義的な社会で生きる人々の自己のアイデンティティーの危うさ、ひいては現代アメリカ社会の危うさを感じないわけにはいかない。ワシントンで Tom と会見した立派な肩書を持つ博物館の秘書は、若く無名の Tom を相手に必死に自慢話をし、まるで自分の社会的立場に焦燥感を抱いているかのような様子を見せる。また都会のオフィスで働く人々の生活は Tom には “so petty, so slavish” (232) と感じられ、利益や名誉を追うことには必死で、その熱意と反比例するかのように自らの存在価値に自信のない都会のビジネスマンたちの生き方に Tom は気をめいらせる。この Tom の気持には、物欲を追う社会の風潮を嫌う St. Peter の根源的な自己が重なり合う。

また、Tom とは一度強い友情で結ばれながら、遺物の売却を巡ってけんか別れすることになる Blake の存在は Tom の、そして St. Peter の自己探求の行きつく先を象徴する。Tom の留守中に Blake は遺跡をドイツ人の蒐集家に売却し、それによって得た金を Tom の将来の大学進学のために預金するのだが、その行為に憤慨した Tom との友情が崩れたことで Blake は一人谷底へと降りていくことになるのである。Blake の「降下」は、Tom の、ひいては Tom と共に鳴し合う自己を持つ St. Peter の自己の深層の探求を意味する。遺物を売却した Blake に反感を持ちながらも、同時に Tom は自分が

いずれは進学を希望していることも、遺跡がもはや公の学術的研究の対象にはならないことも自覚している。この現実の上で Blake は Tom にとって役立つを行いをしたのだが、それでも Tom は彼に失望してしまうのである。Tom は Blake への怒りと Blake を失うことを通して、根源的な自己が求める理想の矛盾点とその現実味のなさを知るのである。

無学な労働者である Blake は、他人のためには何でもやるが自分のためには何もしないという利己性とはかけ離れた人物である。彼が遺跡の遺品を売ったのも友人 Tom の将来の幸福のためであり、Blake 自身の強い欲求や自己主張は描かれない。このような教育を受けない Blake のアイデンティティーが希薄であり彼が「見えにくい」存在であることは示唆的だ。Blake は自らは縁のない「教育」の意味を、自律的なものとは考えない。Blake の教育観は次のように描かれる。

He had great respect for education, but he believed it was some kind of hocuspocus that enabled a man to live without work. (188)

つまり Blake にとって教育や教養というものはあくまでも手段であり、St. Peter が感じるようそれ自体が喜びとなりえるものではない。Blake の教育観においては、学歴という手段によって人は単純労働から解放され、社会階級というヒエラルキーを登ることができ、消費社会の中でより物欲を満たすことができるようになるのである。このように我々は Blake の教育観を通して、物欲や社会階級、金銭と無関係な教育、学問的活動というものが「見えない」というアイロニカルな示唆を読み取ることができる。

互いに友情を失い、孤独になった Tom と Blake ではあるが、Tom が太陽の光を受けるメサの地表で大学進学のための勉強にとりかかり都市社会へと介入していくのに対し、Blake は暗い谷底に降りて二度と姿を現さない事の対比は示唆的である。つまり Blake の行為が象徴するように、人が現実との接触を失い、ひたすら自己の深層に潜り込んでいく時には彼は見失われ、

Tom の行為が象徴するように、人が矛盾する自己の理想を抱えながらそれでも現実社会の中で自己を見つめるときには、彼は自らにとっての幸福と失ったものの意味を知るのである。行方をくらます Blake の姿が示唆するものは、自己の本質というものは永遠の謎であり、探求すればするほど見失われるものではないかという視座ではないだろうか。この “Tom Outland's Story”において描き出されるものは、根源的自我が理想とする生き方を他者との関係で成り立つ社会で追求することの矛盾、利潤を排除した学問の自律性というものの実体のなさ、さらには人々のアイデンティティーを不明瞭にしていく現代アメリカ社会への作者の危機感であると考えられる。

III Augusta の中に見出された自己

St. Peter の意識が彼自身の人生に向く時が描かれるのが第三部 “The Professor” である。ここで St. Peter は自分の人生における重要な事は自分の意志ではなく偶然によって決まってきたと考えており、彼が経験した幸運も彼の自己の本来性とはかわりがないかのような一種厭世的な気分にとらわれている。それゆえ彼はさまざまな偶然の属性を得る以前の幼少のころに思いをはせる。すると、彼は、Tom の人生を鏡として見ることで根源的な自己が求める生き方を身代わり経験した時とは違って、Tom とは別の少年が、つまり “the boy the Professor had long ago left behind him in Kansas, in the Solomon Valley — the original, unmodified Godfrey St. Peter” (263) が戻ってきたように感じる。彼は自分の少年時代が Tom に負ることなく自然と一体化していた時代であり、またその中で自己の本来性を見失うことのない時代であったことに気づく。子供時代の彼は、“He was a primitive. He was only interested in earth and woods and water. . . . He seemed to be at the root of the matter” (265) と描かれる。つまり彼は自分自身の根源的な自己だけでなく、彼の生命そのもののルーツである事物の根源、言い換えれば生命誕生以前の無の状態に強く惹かれていることが読み取れる。ここで生

と死という対極は、無という共通概念によって同質化される。すると St. Peter の孤独と死へのあこがれは、パラドクシカルなことではあるが若さと生命の根源へのあこがれでもあると考えられるのである。

死の誘惑を感じる彼が古い家の書斎でまどろみ始めた時に、風でストーブが消える。彼はガスが部屋に充満し始める様子に気付きながら、“How far was a man required to exert himself against accident?” (276) と思う。つまり彼はそれに対してそのまでいいのではないか、これまでと同じように偶然に任せればよいのではないかと考えるのである。だがこの St. Peter の死を阻み、彼を蘇生させるのが家政婦 Augusta である。かくして St. Peter の根源的な自己は、無であり究極の孤独である死と同一視されることなく、むしろ家族を持たず、人生の花の咲かない側面、“the bloomless side of life” (280) を生きる Augusta の孤高性と共鳴するのである。

Augusta は自らの喜びを追求したり、自己主張をする人物ではなく、“she was ‘needed’” (280) と描かれるように人から必要とされることによって生きているのである。求められる役割と与えられる偶然をそのまま受け入れるという自己の在り方は、人生の時間の経過と時がなじえたもの、奪ったものをすべて肯定する生き方と考えられる。St. Peter は Augusta の生き方を鏡としてそこに現在の彼にふさわしい自己の在り方を見出すのである。Sandra Seltzer は、St. Peter の行きついた先を “he arrives at self-awareness and self-acceptance” (Seltzer 148) と表現する。彼が “he supposed he would have to learn to live without sherry” (282) と考える様子は、St. Peter の社会的自己と変化していく時間の受容を示す。

死に直面して蘇った St. Peter の日常は一見すると物語の冒頭部分と変わらない。だがこの経験の後、Tom の思い出はもはや St. Peter にとって彼の自己を映す鏡ではなく、彼とは乖離した「他者」となる。彼は Tom に投影されていた青春のエネルギーや理想、孤高へのあこがれといったものと決別し、新たな老年期の現実と対峙する。人生の冬の時期の価値は自分を必要と

する人々のために社会的自己を生きることであるということを身をもって示す Augusta により命を助けられた St. Peter の現実の受容の様子には、本能的な自我の主張とは対照的な宗教的なイメージが漂う。

この St. Peter の物語によって示唆される視座のひとつは、人間は時間をかけてその中で起こる偶然によりさまざまな属性を身につけ、多面的な自己を手に入れていくのではなく、逆に時間の流れとともにさまざまな根源的自己の欲求と決別し、その時々の現実にふさわしい社会的自己を受容しているのであるというパラドクシカルな時間意識と考えられる。アメリカ社会の過去により魅力を感じ、変化を嫌った Cather にとっても、St. Peter が体現する現実受容はやや辛い課題であったと考えられる。

結　　び

St. Peter が窒息の危機から命拾いをし、未来と家族に向き合う決心をするところでこの物語は結びを迎える。物語の始まりからこの時点まで、季節は循環することで物語冒頭部の季節へと戻ってきているが、時間は戻ることなく一年が過ぎ、娘夫婦には新たな命が誕生しようとしている。同じように St. Peter の自己探求は循環し、彼自身も同じ生活環境に戻っているが、彼の人生観は以前とは変わっている。変わらないのは若くして亡くなった Tom の思い出だけである。“the city Tom finds has its eternal order because it is dead, just as Mother Eve can project her emotions across the centuries precisely because she is mummified” (Porter 213) という David Porter の指摘も、変わらない永遠の秩序を保つことができるのは時間の流れからはずれた死者だけであることを示す。Tom が大切にした “Mother Eve” をはじめとする古代の遺跡もまた時間の流れからはずれた存在であり、それらが現代社会で価値を評価されなかったことは示唆的である。ミシェル・フーコーは「考古学は、あたかもそれが変化と出来事の抽象的な統一性を被ったように、さまざまな断絶の共時性を脱臼させる。〈時代〉はその根底的統一性でも、

その地平でも、その対象でもない。すなわち、たとえ考古学が時代について語っても、それは常に、確定された言説=実践についてであり、その諸分析の帰結としてである」(フーコー 268) と述べ、考古学的価値の限界を説明する。生き続ける St. Peter の物語は、生きていくことは時代とともに変化し、また時代の変化を受容することであるというメッセージとなる。

St. Peter の自己探求の旅には、Cather 自身の社会の変化に対する嫌悪感やその克服過程での自己の葛藤が投影される。Joseph Urgo は、Cather がアメリカ社会における “physical and psychic migration” (Urgo 16) をこの作品に表現したと指摘する。St. Peter の自己探求の結末には、Cather の変わりゆくアメリカ社会受容の意志と、若さや過去への執着を放棄する意志、さらには、過ぎゆく時間がなじめた「老い」の現実受容の意志が示唆されていると考えられるのである。

註

1. このことについて例えば David Porter は、“At one point she admits that she is ill in bed partly to avoid having to see people” (Porter 203) と書いており、Cather が人を避け、自分の内に籠るようになっていたことを示している。
2. Willa Cather, *The Professor's House* (New York : Vintage Books, 1973) 11. 以下、本稿中の *The Professor's House* からの引用はすべてこの版に拠る。
3. また St. Peter の保守性には文明の利器を好まなかった Cather の保守性が重なりあう。Guy Reynolds は “Cather was indeed a conservative rather than a radical or liberal” (Reynolds 8) と指摘する。また、Sergeant は “Her personal life seemed to go on very much as before; no car, no radio, nor any other time-abridger marred the leisurely pace of Bank Street” (Sergeant 202) と述懐している。
4. Skaggs は Tom が体現するものを次のように表現している。

Tom Outland is an appropriate hero for a pre-adolescent mind that has not yet accepted the need for compromise and recognition of complex ambiguity required for living sensitively with others. (Skaggs 80)

Works Cited

- Cather, Willa. *The Professor's House*. New York : Vintage Books, 1973.
- Edel, Leon. "A Cave of One's Own." in *Critical Essays on Willa Cather*. Ed. Murphy, John J. Boston : G. K. Hall & Co., 1984.
- Humes, David Bryant. *The Importance of the Solitary Individual: A Study of Solipsism in Willa Cather's Protagonists*. Ann Arbor : University Microfilms International, 1982.
- James, Henry. *The Art of the Novel*. New York : Charles Scribner's Sons, 1962.
- Meltzer, Milton. *Willa Cather: A Biography*. Minneapolis : Twenty-First Century Books, 2008.
- Porter, David. *On the Divide*. Lincoln and London : University of Nebraska Press, 2008.
- Reynolds, Guy. *Willa Cather in Context: Progress, Race, Empire*. London : Macmillan Press LTD, 1996.
- Sergeant, Elizabeth Shepley. *Willa Cather a Memoir*. U.S.A : University of Nebraska Press, 1963.
- Skaggs, Merrill Maguire. *After the World Broke in Two: The Later Novels of Willa Cather*. Charlottesville and London : University Press of Virginia, 1990.
- Throne, Marilyn Elizabeth. *The Two Selves: Duality in Willa Cather's Protagonists and Themes*. Ann Arbor : University Microfilms Inc., 1970.
- Urgo, Joseph R. *Willa Cather and the Myth of American Migration*. Urbana and Chicago : University of Illinois Press, 1995.
- ストー・アンソニー 『ユング』 東京：岩波書店、1990年。
- フーコー・ミシェル（中村雄次郎訳） 『知の考古学』 東京：河出書房新社、1989年。